

ダメ技術者の挑戦



かどた せいじ*
門田 誠司*

取得した資格：技術士（建設部門）
資格取得年度：平成28年度（施工計画）、令和元年度（土質基礎）、令和6年度（道路）

受験の動機

私が技術士試験を受験したきっかけは2つあります。1つ目は、私がまだ若手だったころ、上司が技術士を持っていることを知り、「将来何かの役に立てば」と思ったこと、2つ目は、このままでは「将来、周りに取り残される」という焦りでした。というのも、私はもともと大学での専攻が土木ではなく「材料」であったこと、また、周囲の同期や先輩後輩に比べ、日ごろから「ダメ技術者」というコンプレックスがありました。どのくらいダメかという具体的な、表などの確認作業においていわゆる「縦横の計算」が苦手ミスばかり、期限のある業務においてもいつも提出がギリギリ、何かわからないことがあれば、自分で調べずにすぐに人に聞くなど、典型的なダメ技術者でした。このように、私は「何か大きな『きっかけ』がないと、将来、本当に取り残される。」という焦りがあり、その『きっかけ』が技術士試験でした。

技術士試験における「極意」

そんな私が、いきなり「極意」というのも偉そうな話ですが、ある本にこう書かれていました。

「合格」＝「正しい努力」×「適切な期間」
×「確実なノルマ消化」

私は、上述したようなダメ技術者でしたが、知らない人でもすぐに懐に入れる「図々しさ」だけは持ち合わせていました。この「図々しさ」が「正しい努力」をする上では非常に役に立ちました。

論文試験における「正しい努力」

論文試験における「正しい努力」、それは「合格者に自分が書いた論文を添削してもらおうこと」です。そこに至るまでには様々なインプット作業をしているのですが、一番大事なことはその「インプットした知識を（論文として）アウトプットし、それを客観的な視点で添削してもらおうこと」です。なぜかという、添削してもらって「試しに作成した論文と正解とのギャップ」を確認しないと、伸びないからです。

私の場合は、ボランティアな組織¹⁾²⁾が運営するセミナーに参加し、論文を添削してもらい、「初めまして」の講師でも、持ち前の「図々しさ」を活かし、わからないことをいろいろ聞きました。そうすることで「題意との一致」、「論旨の飛躍」や「ロジックの矛盾」を指摘してもらい、修正を重ねることで「ロジックの通った読みやすい論文」が書けるようになりました。

命取りとなる「出願」

前述した論文試験と前後しますが、技術士二次試験を受けるためには4月に「受験申込書」を提出し、そこに720文字で、自分がこれまでに行ってきた「業務経歴」と「業務内容の詳細（代表業務）」を書かなくてはなりません。これを「アルバイトの履歴書」のように思っている人が少なからずいて、そういう人は、論文試験の後にある「口頭試験」で青ざめることとなります。そのくらい重要な「受験申込

*今治市 建設部 建設政策局 港湾漁港課 課長補佐

書」も論文同様、2月頃に開催されるセミナーに参加し、「図々しく」添削してもらいました。

どのくらいのボリュームをやったのか？

私の場合は、幸いにも3科目とも一発合格だったので、よく「どれくらいのボリュームをやったのか」と聞かれます。時間で言うと、朝1時間半、昼休み25分、夕方1時間、これを1～7月までの毎日、7か月間続けると、合計約600時間となります。それを言うと「やっぱりそれぐらいやらないといけないか」と言われることがあります。ただ、自分としては「設定したノルマを日々こなしていった結果、これだけの時間がかかった」という感じで、そういった身近な目標の設定が、長く続けられた要因であったのかも知れません。

合格する論文

今は、ネット上に（有料で）「合格論文」というものがアップされています。そういった論文を見てみると、合格している論文はすべて「難しいこと」が書かれた「高尚」な論文かといえば、必ずしもそうではありません。では、最近はどういった論文が合格しているかというところ「(国の政策など) 試験官が書いてほしい内容が書かれた、読みやすい論文」が合格していることが多くなっています。具体的には、国土交通白書等に書かれている「現在、国が進めている政策」について、論旨の通った構成で、接続詞などを織り交ぜながら書かれた「読みやすい論文」が合格しやすいです。このような論文を書くには、やはり個の力で打破するのはなかなか難しいため、他者に添削してもらうことが、とても重要です。

準備が全ての口頭試験

そのように添削等を重ね、論文試験には何とか合格できましたが、その後に東京で開催される「口頭試験」が待っています。口頭試験の合格率は「9割」なので安心かといえばそうではありません。実際に受験する身になると、不合格であった場合には、また「論文試験」から受験しないといけないので「残りの1割」にならないようにするため、必死でした。

想定問答を200～300個程度用意し、四国以外でも受講できる「模擬面接」を3回受験し、口頭試験に無事合格できました。ただ、実際に聞かれた質問は10問くらいでしたので、しっかり準備をすれば、口頭試験は合格できる試験だと思います。

変えがたい刺激

こうしてダメ技術者であった私は、現在、昔よりは少しマシになりましたが、自信がないのは今でも変わっていません。ただ、一つだけ変わったことがあります。それは「研鑽が刺激に変わった」ということです。最初に受験した平成28年度の合格発表が出たときは、「こんなしんどい思い、二度とするまい」と思いました。そのため、それまでの勉強時間をサイクリングやアウトドアといった趣味に費やしました。しかし、不思議なことに、それらの趣味では刺激が満たされなくなっていたのです。

資格の勉強は「日々の自分との闘い」、「試験前の緊張」や「無力さの痛感」等、「ネガティブとの闘い」が多いです。しかし、それと同時に「自分との戦いに勝つ充実感」、「試験後の解放感」そして「合格の喜び」等、それらを上回る変えがたい「生きる喜び」のようなものを得ることができます。それが刺激となり、現在は毎年のように何らかの試験を受けないと気が済まない体質になってしまいました。

おわりに

技術士試験は、本当につらく「いばらの道」ですが、今思えば一番のハードルは「技術士試験を受ける」ことを「決意すること」であったと思います。現在、受験を迷っている方もいらっしゃると思いますが、私のような「ダメ技術者」でもこうして合格できた試験です。是非「勇気ある決断」をしていただけたらと思います。合格したら楽しいですよ。

<参考文献>

- 1) SUKIYAKI塾
- 2) SUKIYAKI塾四国



【著者紹介】門田 誠司（かどた せいじ）

平成14年、今治市に土木職として入庁。下水道、道路、農業土木、水道などを経て、現職。好きな言葉は「餅は餅屋に聞け」。